
ルームメイト味の珈琲

武智舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルームメート味の珈琲

【Nコード】

N1262P

【作者名】

武智舞

【あらすじ】

一杯の珈琲の番外編です。

本編読破推奨。

あれから一年と少し後の、二人のこれからのお話。

第一話 一日のはじまり

窓から差す朝日が、さんさんと部屋に降りかかる。

照らされた部屋は、シンプルでいて写真が多く飾られた、女の子らしい飾り付け。

部屋の主は、ベットにいた。

きつちりと布団をかぶって、すやすやと寝息を立てている可愛らしい女性だ。

やがて、女性の、高津美帆たかつ みほの丸い頬がぴくぴくと動いたかと思うと、目がそろりと開いた。

まだ、寝ぼけてるような顔である。

美帆は体をのろのろと起こしながら、きよろきよろと辺りを見渡した。

そして視線を止めたのは、七月を主張する三角形のカレンダーの、目覚まし時計。

「……………なんで、9時？」

はじめて口を開いた美帆は、すっかり目が覚めたようである。

美帆は慌てて部屋を出て行った。

リビングに行くと、田沢里織たざわ さとりが朝食を並べていた。

エプロンに身を包む彼女の後ろ姿は、つややかな墨色の長髪と相まって、不思議とほっとするものがある。

ダイニングテーブルに並ぶ朝食は、太陽のように輝くスクランブルエッグと香ばしく焼けたトースト、色とりどりのサラダにブラックホール色に甘ったるい色の二種類のコーヒー。

「さとり先輩！ 私、やばいですよ！」

「あんたは明日が朝一でしょうが。まだねぼけてるんなら、冷や水浴びてきなさい。ちようど、氷があるわよ」

「……………ああ！」

冷ややかな里織の言葉に、一気に頭の冷えた美帆は納得したよう

に頷き、

「でも、冷や水は勘弁してください」

そして、洗面所へ逃げていく。

里織はやれやれと溜息をついていた。

それから、すっかり支度を終えた美帆は朝食を食べた。

里織も、彼女の目の前に座って食べている。

お互いフォークとナイフを使っているが、里織が特に上手だった。時折、二人は会話を挟んで、とてもさわやかな朝の風景に見える。「今から寝坊していると、これから大変ってわかってる？ それと家でも少しは落ち着きなさいよ。騒々しいわ」

「すみません」

実際は里織が愚痴って、美帆は素直に謝っている構図である。

しかし、見ようによつては滑稽である。なぜなら、美帆は里織よりずっと背が高い。それがなんだか、後輩が里織で、先輩が美帆に見えるのだ。

それに愚痴っているものの、里織の表情にとげとげしいものはない。むしろ、妹を見守るお姉さんのように見える。

「もう。謝れば、簡単だつて思つてない？」

「さとり先輩なら、きっと許してくれると思つてますから」

その言葉に里織が何かを言おうとしたが、彼女は可愛らしく笑つた。

「私なりの信頼ですよ？」

「いないわ」

しかし、里織はばつさりと切り、おいしそうにフォークをすすめて、ふと彼女に聞いた。

「美帆ちゃんは今、講義は夕方まであるの？」

「そうですよ。補習が入りまして。だから、買い物お願いできますか？夕食を作るのには間に合いそうですから」

「私がするわ。無理にしないでいい。私が代わりにしてもらつときもあるでしょう？」

美帆は申し訳なさそうな顔をするが、里織は苦もなく引き受けた。そして美帆は笑った。

「ありがとうございます」

「そういえば、あの服はまだ着ないの？ 前に、一緒に買い物に行ったときの青いスカートよ」

今の美帆の装いは、クリーム色のサマーセーターに裾のほつれたシヨートパンツである。

ぴたりと張りつくようなサマーセーターが、彼女の豊かなシルエットをやたら艶美に仕上げていた。なんとなく匂いたつものがある。逆に里織は、淡いピンクの半袖シャツを上から羽織り、ミニのギヤザースカートからのびる足を薄手のストッキングが包んでいる。

「……あー、あのお揃いですね。せつかくお揃いの色が手に入っただんですから、さとり先輩が着てくれたら私も着ます」

「どこかお揃いよ。色が同じなだけじゃない。………いいわ。明日、はくわ。美帆ちゃんもそうしなさいよ」

「ラジャです」

「そのしゃべり方、やめなさい」

「えー？」

唐突に、里織が不愉快そうな顔になった。

美帆は調子に乗ったように笑うが、里織は顔色を変えない。

「あいつの友達なんかの影響受けてるみたいじゃない」

「だって、面白いんですもん」

「やめて」

「ちえー。わかりましたー」

美帆は、からかっているようにも、残念そうにも見える面持ちで、けらけらと笑う。

それを見て、今にもやれやれと言いつつな里織であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1262p/>

ルームメート味の珈琲

2010年11月27日23時30分発行